



(独) 国立病院機構
北海道がんセンター名誉院長
西尾 正道氏
(にしお まさみち) 1947年生まれ、札幌医科大学卒。74年国立札幌病院北海道地方がんセンター(現北海道がんセンター)放射線科勤務、88年放射線科医長、2007年副院長、08年院長、13年4月より現職。日本医学放射線学会治療専門医。

特集

スペシャリスト
対談

PCR検査を受けられない…

—北海道がんセンターでは、2020年4月に新型コロナウイルスのクラスター感染がありました。ですが、どういった状況

でしたか。
西尾 当院でクラスターが発生したときは、2週間ほど手術は中止され、外来も閉鎖の状

態で病院としてほとんど機能していません。進行がんの人がたまたま胆のう炎になって発熱して当院の消化器内科に入院しました。

PCR検査で最終的には陽性の結果だったんですが、結果が出るまでの3日間のうちに看護師が3人感染し、クラスターが発生しました。病院の方でPCR検査ができなかったものですから保健所経由でやっと検査を受け

世界を席巻した新型コロナウイルスは、私たちの暮らしを一変させた。道内の医療・福祉の現場でもクラスター感染が相次ぎ、さまざまな問題が浮き彫りになっている。今回はコロナ感染対策のスペシャリストである北海道医療大学の塚本容子教授との対談で、体験談を交えた読者必見のホットな情報をお届けする。(20年12月18日現在)

「コロナ禍で最大の問題は社会の分断」(塚本氏) 「がんもコロナも生活環境病です」(西尾氏)

北海道医療大学
看護福祉学部教授

塚本 容子氏

北海道がんセンター
名誉院長

西尾 正道氏

られた状況でした。検査が迅速にできなかったことがクラスター発生の原因でした。

他の病院からも「100回ぐらい電話してもPCR検査を受けられない」「そもそも保健所に電話がつかない」といった苦情の声を聞いています。
塚本 私の知り合いも

北海道がんセンターで治療を受けられず、2カ月間治療が延期になっている状況でした。

北海道がんセンターのクラスターで感染してしまった30代後半の隣臓がんの患者さんがいて、当初は地元に戻っても在宅医療を受け入れてもらえる状況にありませんでした。そ

の後訪問看護を受けられたのですが、残されたわずかな時間なのに、家族に会えない時期もありました。北海道医療大学で抗体検査を受けて、抗体があることを確認して家族と一緒に6月に看取った、ということがあります。病院でクラスターが発生してしまおうとがん治

療に影響が出る怖さを感じました。
西尾 今回のクラスターを教訓に、北海道がんセンターでは入院する患者さんは全員3日前にPCR検査で陰性を確認してから入院させることを徹底しています。

北海道医療大学
看護福祉学部教授
塚本 容子氏
(つかもと ようこ) 1970年生まれ、千葉大学看護学部卒。日本で臨床を積み、米国CDCのインターンシップ後、海外でナースプラクティショナーとして勤務。公衆衛生学博士。2005年4月から北海道医療大学に勤務。

塚本 北海道がんセンターでクラスターが発生した20年4月ごろは、全国でも新型コロナウイルスについてまだよくわかっていない状況で、クラスターが拡大してしまったことが大きかったと思います。たとえば「無症候(感染しているが症状がない)の感染者がいる」ことや「PCR検

査が7割しか正確ではない」とか、正しい知識がなかったことが原因だったかも知れません。
西尾 北海道医療センターでもクラスターが発生しましたが、PCR検査で「偽陰性」の人からでした。
塚本 屋台船からの感染で全国的に注目された永寿総合病院(東京都)でも大規模なクラスターになりましたが、そこは無症候での感染が屋台船から続いていた。PCR検査で「偽陰性」の方に対して隔離を解除してしまったということがクラスター拡大の大きな要因かと思われます。



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから
<http://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

TEL 011-644-0101

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)